
ダークブルーの瞳の娘（改）

1 2 月の風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダークブルーの瞳の娘（改）

【Nコード】

N0290K

【作者名】

12月の風

【あらすじ】

ダークブルーの瞳の美しい娘は、街の若者達を虜にしています。若者の恋は盲目です。ファンタジーのような、おとぎ話のような、恋愛小説のような・・・そんなお話。いただいた評価・感想をもとに、ちよっただけ表現等を変えての投稿です。本筋は同じです。

エウゲンは恋をしました。

ダークブルーの瞳をもつ、美しい娘に。

国一番の大きな街で、その娘は多くの男を虜にしていました。娘の父は国の兵士であり、娘の家は中流階級でした。

エウゲンは16歳でした。彼の全ては、ダークブルーの瞳にばかり向かいました。

初めての熱烈な恋に、毎日毎日、胸が張り裂けそうでした。彼の家は靴屋でしたが、革を縫うのも靴底を修理するのも、ほとんど手につかなくなっていました。

ついにエウゲンは耐え切れなくなり、恋しい娘に会いに行きました。

「どうか僕の願いを叶えてください。あなたが愛しい。あなたなしでは生きていけない」

このような台詞ならば、娘はうんざりするほど男たちから聞かされていました。

「ごめんなさい。私はあなたなしでも生きていきます」

エウゲンは絶望しました。

自分で発した愛の言葉の通り、もう生きていけないと思いました。その夜、エウゲンは家族へ置手紙をすると、自室で一人、ナイフを使って自害しました。

彼の両親は悲しみ、街の若者達はひそかに冷笑したものでした。

エウゲンの物語は、これでおしまいです。

キリルもまた、ダークブルーの瞳の娘に恋焦がれる若者の一人でした。

彼は何度か、手紙をつけて娘へ贈り物をしていました。それだけ

で、ひとまず心が満たされるのでした。

キリルは富豪の家の使用人で、主にその家の荷運びの仕事をしていました。街を離れることも多かった彼は、旅先で珍しいものや美しいものを見つけては、ダークブルーの瞳を想い、土産にしたのでした。つらい旅の中、その至福の時だけが、彼の救いでした。

キリルが長期の仕事から街へ戻ってきた、ある日のことでした。

ダークブルーの瞳の娘が、貴族の嫡男と婚約したという噂で、街は騒がしかったのでした。

キリルは絶望しました。

届かなかった想いと、自分の身分の卑しさに。

彼は今回の旅の土産を、手紙をつけずに運び屋へ託しました。そして、主人の屋敷の裏手で首を吊りました。

後に届けられた、キリルの最後の贈り物は、娘に受け取ってもらえませんでした。贈り主がわからなかったからです。このような贈り物は、うんざりするほど娘のもとへ届けられていたのです。

キリルの物語は、これでおしまいです。

サンドロスもまた、ダークブルーの瞳の娘に恋焦がれる若者の一人でした。

彼は名門貴族の嫡男でした。金も権力も、思いのままでした。

両親に働きかけ、サンドロスはダークブルーの瞳の娘との婚約を取りつけました。彼女を幸せにしたいという想いで、彼の胸ははちきれそうなほど、いっぱいでした。

数日後の婚礼の時、ダークブルーの瞳の娘は、輝くばかりに美しい装いでした。

サンドロスは大勢の親族や友人の前で、誇らしく誓いの言葉を口にしました。

「彼女を生涯愛し、守り抜くことを誓います」

しかし、ダークブルーの瞳の娘は、誓いの言葉を言いませんでした。

た。

「神の前で嘘はつけません。私はあなたと結婚できても、愛することできません」

婚礼の場は、水を打ったように静まりました。

サンドロスは絶望しました。

羞恥も手伝って、とてもその場に居られませんでした。サンドロスはそばにいた騎士の剣を奪い、その場で自害しました。

祝福の場は惨劇へと変わり、大混乱となりましたが、その日の夜にはすっかり片付けられました。サンドロスの家は彼の弟が継ぐことになり、ダークブルーの瞳の娘はうんざりしながら家に帰りました。

サンドロスの物語は、これでおしまいです。

レアンダーもまた、ダークブルーの瞳の娘に恋焦がれる若者の一人でした。

彼は奴隷の身でしたので、恋に落ちた瞬間、彼の考えたことはひとつでした。

レアンダーは、ダークブルーの瞳の娘の周囲を、時間をかけて調べました。そしてある夜、彼女の部屋へ忍び込むと、娘の手足を縛り上げ、布で口をふさぎました。

「あなたをどんなに想っても、どうせ叶わない」

レアンダーはナイフを持って、そう言いました。

「だったら、あなたが誰かのものになる前に、あなたを殺して僕も死ぬ」

娘はダークブルーの瞳で、悲しそうにレアンダーを見ただけでした。

しかし、そのときでした。異変に気づいた娘の父が部屋に駆けつけ、持っていた剣でレアンダーを斬りつけました。そして、娘の縛めをすべてほどきました。

レアンダーは息も絶え絶えに、ダークブルーの瞳を見つめて言いました。

「一緒に、死んでほしい。そして、来世で結ばれよう」
娘は父の腕の中で、うんざりして言いました。

「私は、死にたくありません」

レアンダーは絶望しました。

もうとつくに全てに絶望していると思い込んでいましたが、もつと絶望しました。

レアンダーは持っていたナイフを使い、その場で自害しました。
ダークブルーの瞳の娘は、より治安の良い地区に引越しをしました。
部屋は二階にして、戸口に見張りを立たせました。

レアンダーの物語は、これでおしまいです。

ソティリオもまた、ダークブルーの瞳の娘に恋焦がれる若者の一人でした。

鍛冶屋の息子であったソティリオは、屈強で自信に溢れた青年でした。

特注の槍を、兵士である娘の父へ届けに行った時に、ダークブルーの瞳に魅入られたのでした。それ以後、彼は街一番の鍛冶屋になって娘を妻に迎えようと、必死で働いていました。

ある日、ダークブルーの瞳の娘が不治の病にかかったという噂を、ソティリオは耳にしました。

一目だけでも見舞いたいと、多くの若者達が彼女の家へ押し寄せました。整理券が配られるほどの混雑ぶりでした。

ソティリオは整理券を握り締めて、数日後、ようやくダークブルーの瞳と向き合えました。

「ユニコーンの角を削り煎じて飲めば、どんな病でも治す薬になる」という伝説がある」

ソティリオは娘に約束しました。

「必ず手に入れて戻ってくる。そうして病を癒したら、結婚してほしい」

ダークブルーの瞳の娘は、寝台に横たわったまま、うんざりしました。そして、悲しそうに言いました。

「病は治りません。同じ病で亡くなった友人がいます。彼女が助からずに私が助かるなど、道理にかなっていません」

「そんなことはない。俺があなたを助けてみせる」

ソテイリオはすぐに、ユニコーンが住むという森へ旅立ちました。森での潜伏は過酷でしたし、ユニコーンは一蹴りで岩をも砕く恐るべき生き物でした。しかし、彼は屈強な若者でしたから、一ヶ月後に見事、角を手に入れて街へ戻ったのでした。

ソテイリオは疲労でボロボロの体に鞭打って、娘の家へ直行しました。

ところが、待っていたのは、二度と開かれることのないダークブルーの瞳でした。

ソテイリオは絶望しました。

彼は食事をとらず、過労も手伝ったのか、数日後、眠るように息絶えました。

持ち帰られたユニコーンの角は、病に苦しんでいた5名の子どもの命を救いました。そして、その成分が研究され、多くの薬を生み出す助けとなりました。一方で、多くの若者が、ダークブルーの瞳の娘の後を追って、自害しました。

ソテイリオの物語は、これでおしまいです。

ヴァシリもまた、ダークブルーの瞳の娘に恋焦がれる若者の一人でした。

毎晩毎晩、ダークブルーの瞳を夢に見ました。幸せな気持ちで目覚め、まだ暗い早朝のうちからパン生地をこねました。ヴァシリはパン屋の息子でした。

そうして美味しく焼きあがったパンを、週に一度、ヴァシリは手紙と共に、ダークブルーの瞳の娘に送り届けていました。

ある日、ヴァシリは娘の余命がヶ月もないことを知りました。いてもたってもいられず、一目会いたくて家まで行きました。すると若者達が長蛇の列をつくっており、整理券が配られていました。ヴァシリはそれを見て、啞然としました。

彼は整理券を受け取りませんでした。代わりに、心を込めた手紙を書いて、次の日に家の者に託しました。

『愛しい君へ

毎週パンを届けていたヴァシリです。

まさかこんなに早く僕の恋がこの世を去る運命だったなんて。今はただただ、驚いています。

病に倒れている君は、人と会うだけでも気力や体力を使うのではないかと思い、涙をのんでこうして手紙を書くことにしました。読んでもらえなかったとしても、仕方がないと諦めます。今は自分の体を一番に考える時です。

君を失った世界を、まだ僕は想像できません。きっと、耐え難く空虚で絶望的な世界でしょう。

でもそれ以上に、この恋を僕にくれた君に、伝え切れなくらいに感謝することでしょう。

君に恋したこの二年間、毎日が夢のように華やかでした。

君にも、そんな想い人がいたのでしょうか。こんなことになってしまった今、君が素敵な人生を歩んだことを祈るばかりです。

もしもこの手紙が君の美しい瞳に触れて、そしてまだパンを食べられる体力があるならば、ぜひまた僕のパンを食べてください。焼きたてを届けると約束します。

パン屋のヴァシリ』

数日後の夜、ダークブルーの瞳の娘の母が、閉店時間のヴァシリの店にやってきました。

ヴァシリは乞われるままについて行きました。数刻後、ヴァシリは娘の部屋に通されて、ダークブルーの瞳と向き合っていました。整理券をもった若者達は去った後で、屋敷はとても静かでした。

「こんばんは。パンを持ってきたよ」

ヴァシリは微笑んで、寝台の脇の椅子に掛けました。すると、ダークブルーの瞳が、弱々しく彼を見つめました。

「焼きたてですか？」

ヴァシリは明るく笑いました。

「君はなんにも知らないんだね。こんな時間にパンを焼くパン屋なんて、いないよ」

ダークブルーの瞳が、不思議そうにヴァシリを見つめます。

「あなたの手紙を、読みました」

「ありがとう」

「まるで私が死ぬと決めつけているかのような、内容でした」

「余命一ヶ月って聞いたから」

「あなたは私に恋をしていると、書いてありました」

「恋しているよ」

「おかしいと思います。私に恋をしている男性は皆、私を助けたがりました。私に会いたがりました。短い期間でいいから結婚してほしいと言いました」

「みんな、ずいぶん勇気があるね」

「あなたは」

ダークブルーの瞳が、苛立ったように光りました。

「あなたは、私に恋していない。うそつきね」

ヴァシリはまた、明るく笑いました。

「僕は君に恋しているよ。だって、君に恋している僕は、こんなに幸せだ」

「手紙は」

ダークブルーの瞳に、怒りが灯りました。

「正直、不愉快だったわ。私のことを、全然気遣ってくれていない」「気遣ったつもりだよ。その結果、僕は恋しい君に会えないままサヨナラになるところだった」

「私はこのまま、恋も知らないまま死んでいくのに。まるで、あなただけが幸せになるかのような、内容だったわ」

「僕が幸せになるかどうかなんて、わからないよ。でも」

ヴァシリはいったん息をついて、悲しそうに微笑みました。

「君のあとを追って自分も死のうとは、考えていない。君を失った後、誰かまた別の人に恋したとしても、ずっと君のことを覚えているよ」

「あなたはやっぱり、私に恋していないわ」

「どうして？」

「本気で恋していれば、別の人をいつか好きになるだなんて発想、しないものよ。一緒に死ぬ、来世でまた会おうって、普通言っわよ」「そうか。君はそういう恋が好きなんだね」

ダークブルーの瞳が、大きく見開かれました。

「いいえ」

答えた声は、悲しみに深く沈みました。

「いいえ……。そういう恋は、もう、うんざり」

ヴァシリが優しく微笑むと、ダークブルーの瞳の娘は、泣きそうな顔で言いました。

「本当は、残りの時間を静かにゆっくり過ごしたいの。でも、みんな会いたいつて言うし、断るのもひどいと思って」

「君は優しいね」

「いいえ。私はひどい女よ。恋していると言われても、全然嬉しくないの。たくさんの男性が私のせいで死んでしまったわ。私が彼ら

を、好きになつてあげられなかったばかりに」

「君は悪くないよ」

「ねえ」

ダークブルーの瞳の娘は、ちよつと黙つてから、おそろおそろ尋ねました。

「……明日も、パンを持ってきてくれる？」

「うん。この時間だと焼きたてじゃないけど、いいかな？」

ダークブルーの瞳の娘は、はにかむように微笑みました。

ダークブルーの瞳の娘は、それから一ヶ月もたたないうちに、息をひきとりました。

ヴァシリは悲しみに暮れましたが、絶望はしませんでした。

彼の胸には、愛しい娘が残してくれた、恋する乙女の微笑みがあるからです。

ヴァシリの物語は、このあとも続いていきます。

新たな恋をし、子をもうけ、おじいさんになって、目を閉じるまで。

彼の物語と、娘の記憶は、続いていくのです。

ダークブルーの瞳の娘　・　終

（後書き）

こんばんは、12月の風です。

皆様からいただいた評価・感想をもとにちょっとだけ改稿をしたのが本作です。

プロには許されない所業ですが、アマなのでやってしまいます（笑）
これはこれで、ご感想いただけると嬉しいです。あまり変わってませんけどね。

お読みいただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0290k/>

ダークブルーの瞳の娘（改）

2010年10月8日14時59分発行